



文学部生のリアルな！ 学生生活

Vol. 47

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

法学部

経済学部

商学部

理工学部

文学部

総合政策学部

国際経営学部

国際情報学部

日常すべてが研究対象

文学部人文社会科学科心理学専攻4年 / 私立逗子開成高等学校（神奈川県）出身 **佐々木 浩汰**

昨年、日本心理学会第86回大会で開催

された「学部生・高校生プレゼンバトル」
においてベストプレゼンター（第1席）
という名誉ある賞をいただいた。心理学
という学問は非常に広く、興味の方向性
が多少なりともずれてしまえばまったく
異なる概念が出てくるということも珍し
くない。そんな中、日本心理学会という
基礎から臨床分野まで多様な研究者が集
う場で、自分の研究が認められたという
ことに安堵した。

私が知人や昔からの友人に心理学を学
んでいると言うと、よく「心理学って何
をするの」とか「人の心読めるの」といっ
た質問を受けることが多い。あるいは少
し勉強をされている方からの質問だと
「将来はカウンセラーになるの」という
ようなものもある。心理学をやっても人
の心を読めるようにはならないし、誰も
がカウンセラーをめざしている訳ではな
い。物理学や天文学が自然を対象とした
科学であるならば、心理学は人を対象と
した科学である。我々が普段何気なく行
うこと、たとえば不意に電車の中吊り広

告に目が留まる、テーマパークで散財す

る、食べ放題で原価の高そうなものをば
かり食べる（自分の本当に食べたい好みを
犠牲にしてまで！）という非常に人間臭
い日常の出来事も、心理学にかかれば歴
とした科学的な研究対象である。皆さん
もまだ幼かった頃、日常的な事象のすべ
てに「なぜ」を突き付けたことはなかつ
ただろうか。心理学はいわばその延長線
上にあるのかもしれない。

さて、私の研究テーマは「不気味の谷」
という現象についてである。聞いたこと
があるだろうか。無機質なロボットの見
た目が人間に近づいていくと我々は親近
感や好ましさを覚えるのだが、完全に人
間と同じ見た目になる直前にその評価が
急激に落ち込んでしまい、「人間の見た
目に非常に近いロボットが不気味に感じ
る」という現象のことである。これをグ
ラフで示した際に、まるで谷のように見
えることから「不気味の谷」と命名され
た。この現象は元々工学（特にロボティ
クス）の分野から発生したもので、今日
の心理学では主に知覚・認知心理学の領

域において研究されている。

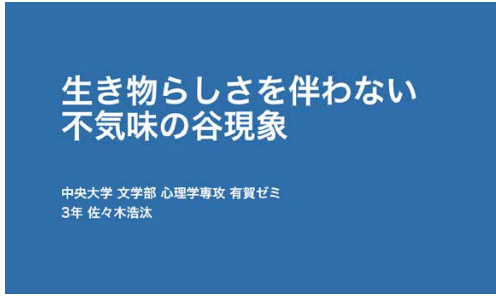
日本認知心理学会によれば、「認知心
理学とは人間の心、特に知覚、記憶、思
考、言語、学習、意思決定、行動選択な
どの認知の働きを解明することを目的と
する心理学の一分野である」とされてい
る。心理学というと、それも頭に「認知」
という聞き慣れない言葉が付くと難しそ
うに思えるかもしれないが、我々の日常
的な行動や意思決定など馴染みのある現
象を研究できるという点では、実は多く
の人が思っているよりも身近なものなの
かもしれない。実は先ほど例に挙げた人
間くさい日常の出来事というの、「注
意」や「消費者行動」という認知心理学
が担うテーマの一例である。

私が中央大学で現在所属しているのは、
この認知心理学を専門とする研究室であ
る。心理学専攻の学生は3年生に上がる
際にゼミに配属されるが、そこで初めて
自分の興味のあるテーマを定め、卒論の
ためにより深く心理学を学んでいくこと
になる。3年次の4月の初め、私は初め
てお会いした認知心理学の教授に大学院

生き物らしさを伴わない 不気味の谷現象

中央大学 文学部 心理学専攻 有賀ゼミ
3年 佐々木浩汰

1



2



1 プレゼンバトルで用いたスライドの表紙 2 大学院ゼミの様子 3 学部ゼミの様子

への進学を考えている旨を伝え、それを見据えた指導をしていただけるようお願いしたい。すると、快く引き受けてくださり、昨年度はそれまでで最も印象に残る1年となった。数度のゼミ内でのプレゼン発表はもちろんその一つである。それ以上に、多くの課外活動によって力が養われたと感じている。先に挙げたプレゼンバトルが行われた日本心理学会第86回大会は、私にとって初の学会参加であり特に印象に残っている。最前線で研究を行う多くの心理学者たちと交流を持つことができたことが最も大きな財産であった。その後、冬には日本基礎心理学会へ参加し、夏の日本心理学会で会った比較的世代の近い研究者たちとさらに交流を深めることができた。学会以外の課外活動としては、これを執筆している丁度1週間前にもラボの大学院生と共に他大学に赴き研究発表をしてきたところである。これも自分にとって非常に意味のある刺激的な体験であった。

中央大学に入学する前、私は周囲にうまく馴染めない高校生であった。しかし自分の研究をより良くするためには多くの人から意見をもらい、それを上手に取り込んでいかなければならない。大学入学後、自分の中で最も変わった部分はこのコミュニケーション力だと感じている。

文学部だより

「歴史学」って必要ですか？

西洋史学専攻では、入学時にアンケートを実施しています。「興味・関心」の項目については、ここ数年「ミャンマー情勢」「コロナ禍」「ウクライナ戦争」といった回答が目立ちます。「取りあえずそれらしいことを書いておこう」という学生も中にはいるかも知れませんが、多くの学生が現在のさまざまな問題に関心を抱いていると言えます。

本専攻には5人の専任教員がおり、古代オリエントから現代までの各時代と、中東・ヨーロッパ・アフリカまでの諸地域を研究領域としてカバーしています。さらに、兼任教員が個別の専門分野を担当することで学生からの多様な関心に応えています。

また、本専攻では卒業論文が全員必修となっています。学生は1年次から基礎を学び、4年次での執筆・提出をめざして長い道を歩むことになります。

はっきり言って、「歴史学」という学問は「コスパ」も「タイパ」も悪い学問です。史料的な裏付けを取る作業はひた

すら地味で、しかも史料が何も語らないこともままあります。ではなぜそんな手間のかかる学問をするのか。それは今を生きる人間として必要だから、だと思います。100年前のスペイン風邪を当時の人たちはどのように乗り越えたのか？戦争は何が原因で、どうすれば終局を迎えられるのか？環境問題は？社会の分断は？現在を生きる自分たちにとって、他人事などというものはありません。この複雑な世界であえて歴史学を学ぶ若者たちを頼もしく思うとともに、スタッフ一同力を合わせて4年間サポートしていきます。



中世ヨーロッパ人々の世界認識 (「TO図」)

文学部事務室 (西洋史学研究室)

ただともあき
多田 智明

そして何より自分が今行っていることに自信を持つことができるようになった。これも大きな変化である。そうなるにつれて不思議なもので、日常のすべてが自分をブラッシュアップするためのものであると感じるようになった。大学の授業だけでは足りない、日常のすべてである。そ

うして日常に目を向けてみると、幼少期に感じた「なぜ」が蘇ってくる。思わぬところに自分の興味は落ちているのである。その「なぜ」の興味を拾い続けながら今後も研究を続け、いざ社会に何か還元できるような発見をしていきたい。